

## 高級車のおもてなし。

モータージャーナリスト、レーシングドライバー、そしてチューナーと多方面で活躍する太田哲也が、世の中に自らのオピニオンを直球で発信し世相を斬る「俺の話を知れ!」。第11回のテーマは高級車の在り方について。高級車に対する欧州車と日本車の考え方の違いを感じた太田哲也が、日本人に高級車は造れないのでは?という疑問について考察する。

TEXT●太田哲也(Tetsuya Ota)

PHOTO●田村 弥(Wataru Tamura)

## 太田哲也の

## オレの話を知れ!

自動車評論家というものは、たとえ自分が興味をもてないクルマであっても、平等に扱って評価すべきだ。ただオレの場合はどうしても私情が入り込み、「自分がもし買ったらどうか」という視点で見えてしまいがち。でもあながち悪いことばかりではなく、その方が興味が深ま

るし、原稿の出来もよいようだ。それに長く続けているせいも、ありがたいことに興味が薄いクルマは取材対象にしない「わがまま」が許されるようになる。

そういう意味では、今回のメルセデス・ベンツS550ロング(シヨ

ーフアードリブン仕様)は、当初食指を動かされなかった。購入する

縁がないと思っただからだ。ところが試乗を強く勧められ、それなら、生活の中に入れてみて判断してみようと思った。山中湖に何年も使っていない別荘がある。妻を誘って行ってみることを思いついた。そして道中、アウトレットに立ち寄り、山道をドライブして、高原のレストランで食事して、そんなメルセデスユーザーらしい(?)行程を計画した。

いつもは助手席(または運転席)に乗る妻を後席に座らせた。助手席を前に畳むと、後方にビジネスシートがすっぽり納まるほどの広大なス

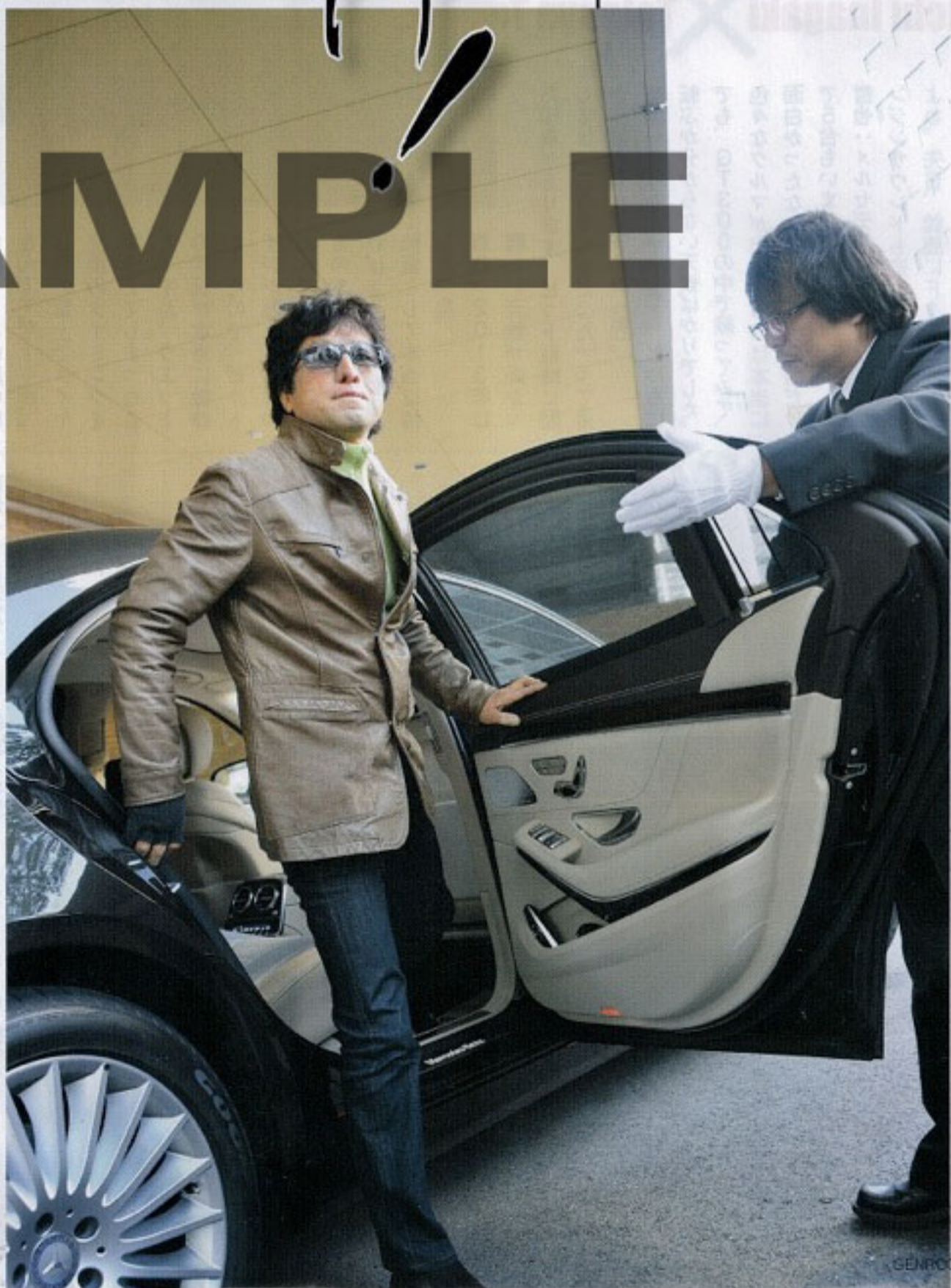
ペースが現れる。座席はホットマツサージ機能付き。ドリンクカップホルダーも保温・保冷機能付き。妻が跳ね上げたオートマンに足をのせ、最大角度45度のリクライニングにふんぞり返る。

いるという関係性が息苦しいのだ。さうだ。なるほど……。この言葉がヒントで、日本車メーカーが高級車造りに苦戦している原因のひとつが見えた気がした。

意識の日本人には苦手分野なのかも。この話を雑談の中で編集担当にしたら、「その話は面白いですね!もう一度Sで再現しませんか」ということになった。

取材当日の朝、担当がS550ロングを運転して自宅に迎えに来た。担当は普段はジャンパーとかトレーナーとか着てモジャックとした雰囲気だが、その日はダークスーツに白いシャツ、ネクタイ姿だった。「お、決めてきたね」。そう言っ

メルセデス・ベンツのSクラスは、伝統と革新を常に時代を先駆け実現するホンモノのハイエンドカーだ。そもそも自動車の黎明期に、庶民の道具としてではなくセレブ層に向けた最高級かつ革新のアイテムとしてメルセデスはクルマを造った。その血脈が現代にも受け継がれている。



SAMPLE



ージをされながら座席を最大限に寝かせてオットマンに足を投げ出す。

「悪くないね」

気分は大会社の社長だ。超多忙の中で安楽な時間を過ごさせる空間だ。ちょっと寝たりテールを出して書き物をしたり。それも業務の一環だ。その日、撮影で担当が「さあどうぞ」と案内する白手袋のしぐさは、妙に板についていた。背筋もいつもよりピンとしている。本人によれば「自然とこうなるんですね。爽快感さえ感じます」と。

馬子にも衣装というけれど、制服姿だと「運転手」という意識が自然



試乗したメルセデス・ベンツS550ロングには、パッセンジャーに最大の「おもてなし」を約束するファーストクラスパッケージが装着されていた。リクライニングやオットマン、温熱マッサージ機能など多様な快適装備が奢られ、後席に座る人物が主役であることが明確に示される。物理的には間違いなく快適なこの空間を、精神的には落ち着かないと感じる人がいるのも、階級社会が徹底されていない日本らしいことなのかもしれない。



も担当が普段着ではなくそれらしい服装と態度でいるせいも、妙に落ち着く。これは何だろうか？

考えてみれば、制服姿の観光バスの運転手さんに「すみませんね、くつろいでいて」などと申し訳なく感じることはない。タクシーでも、運転手さんがきちんとした身なりで丁寧な言葉使いだと、こちらも自然と丁寧な言葉遣いとなる。それは決して下の階級として見ているのではなく、仕事のプロとして捉えるということだろう。

家族や友達だと落ち着けないけど、プロのサービスなら落ち着ける。社員だって運転手として採用したなら、気苦労はないかもしれない。

メルセデスを運転していると何か偉そうに感じる。オレはフォーミュラ出身なので、ストリートアームで寝そべった運転姿勢が好きだ。最近はずいぶんとその感覚は薄れたが、昔のメルセデスは「それはダメ」と言わんばかりに、アップライトな運転姿勢を求めてきた。オレは左足ブレーキを多用するが、以前のメルセデスは、そんな例外を認めないベダレレイアウトだった。まるで学校の先生みたいに「太田くん、授業中は姿勢を正しなさい」と言われている気がした。

しかし偉そうに感じるとしたら、実はプロ意識が高いからなのかもしれない。

S550ロングは、安全性、操縦安定性、加速性、とくに後席での乗り心地はクラウン/マジエスタなどの国産高級車を凌駕している。乗るとすぐにわかる。さらに量産車最多の7つのセンサーを備えた自動ブレーキ、自動追尾、自動操舵などを含む運転補助装置。カメラで路面状態を捉えてダンパーの強さを変えて乗り心地をよくする装置等々。プロフ

者の快適性をこれでもかと作り上げている。

ここではつきりさせておきたいことがある。メルセデスを高級車の代名詞のように捉える人がいるが、オレは違うと思っている。時計で言えばロレックスみたいな存在だ。

ロレックスは世に高級時計として認知されているが、ロレックスよりも高級とされる時計はいくらでもある。パテックフィリップの趣味性や高級さには及ばない。だが、頑丈でガンガン使い倒せる。つまり実用時



ホンモノのブランドは育てるものであり、マーケティングなどで創りあげたものは流行りに過ぎない。100年以上の自動車メーカーとしての歴史が培ったブランドに、半世紀ほどの実績しかもたないメーカーが追いつくのは容易なことではないのかも。

計の中での最高級品だ。

同様に実用車の最高級がメルセデスと言えまいか。だからこそメルセデスは自動車評論家にとっては鬼門なのだ。このクルマを購入してしまつたら、それで「that's all」。だって使っているユーザーには分かるもの。その良さは、評論家なんていらぬよ。

だからオレは評論家の仕事を続ける限りメルセデスは購入しない。同様にGENROQでもお馴染みの時計評論家・広田氏も、ロレックスは着けないそうだ。でもオレは時計の世界ではシロートだからロレックスはOKだと思っている。コインの裏の裏は表みたい話だろうか。違うかな？

本の高級車の違いは、必ずしも階級社会だけが原因ではなく、プロ意識の差、それが引いてはプロダクトの違いになっているとは言えまいか。

例えばクラウンは「高級旅館の女将」を目指している。かつてゼロクラウンの主査からそんなふうになんて聞いた。

旅館の女将は畳に手をついて「いらっしゃいませ」とお客様をもてなす。でもメルセデスは決してそんなことはしない。「プロですから貴殿のために最高のものを提供します。貴殿の目的は私が床に手をつくことではありませんよ。安全性とか乗り心地とか、その他もろもろの性能ですすね」と。

こんなふうなメルセデスはユーザーに媚びず実現できる「最善」を提案する。ユーザーがとやかく言っても全部には耳を貸さず、プロとして一番大事なことは何かを考えている。だから貴方も私をプロとしてリスベクトすべきです——と言っているよう。これを持ってエラそうと思うか、高いプロ意識と感ずるかどうか。昨今はクレマーやモンスターベアレンツの横暴振りが耳に入ってくる。店員に土下座させる場面をユーザーに流した輩もいる。

メディアに登場する経営者がよく口にしている「お客様は神様です」という言葉は、本来はドラッグの「顧客は誰か、顧客のことを考える」ということだったと思うが、それが勘違いを生んで、消費者がゴリゴリ言って土下座までさせてしまう。とても嫌な話だ。作り手はユーザーよりも専門性も知識も高いはずだが、日本車の場合にはマーケティングという言葉の上面をなぞり、「お客様の言うことは何でも聞きます」と、顧客の望みがすべてと捉える傾向が強いと感じる。で

の言うことを聞いてきた料理がうまいはずがない。

プライドでクルマ造りを行うかマーケティングで行うか。どちらが正しいという問題ではないが、プライドが伝統と永続性なら、マーケティングは流行と一過性、高級車に必要なブランド力を育むには、マーケティングだけでは太刀打ちはできないだろう。

かつてフォードが大衆にクルマを広めることを目指してT型を造った頃、メルセデスは富裕層のためのクルマを造った。歴史の違いと言ってしまえばそれまでだが、過度な「おもてなし」の気持ちは、モノづくりを阻害する場合もあるだろう。Sクラスから学ぶことは多い。



### Tetsuya OTA出光 ENJOY&SAFETY DRIVING LESSON 袖ヶ浦フォレストレースウェイにて 3/1開催(予定)

合言葉は、「正しい運転を、楽しく学ぶ!」。Injured ZERO を掲げて開催している、本誌でも恒例の太田哲也氏が校長を務めるドライビングスクールが、3/1に開催される。最新車両のテストドライブや、プロドライバーの同乗走行、また家族も楽しめる企画など盛りだくさんな内容で、GENROQ読者からも好評だ。問合せや申込みはTetsuya OTAスポーツドライビングスクール事務局まで。http://www.sportsdriving.jp